# 親子関係把握の方法論


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小嶋, 秀夫<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/3852 |

# 親子関係把握の方法論

小　嶋　秀　夫

## 1 問　題

親子関係の研究は，人格に対する環境的要因の影響についての研究の一部をなすものであり一口でいえば，「どのような親子関係をもってきた子どもは，どのような人格をもつようになるか」を明らかにすることを目的としている。このような関心から研究をはじめると，つぎの3つの問題が出てくる。

A　親子関係や家庭の記述

B　子どもの人格・行動の記述

C　A，B両変数間の関数関係を見出すこと

さきに筆者（1963）は，親子関係の心理学的研究が，30年以上もの歴史をもちながら，いまだに斉一的な結果を見出したとはいえないことの原因の一つとして，この分野に注がれている努力を方向づける枠組みの検討，なかでも，先行変数である親子関係の記述の枠組みの検討が不足していることをとり上げた。そして，この問題を解決するための研究法の提案を行なったが，今回はそれを方法論的に詳細にし，それにそったデータをいくつかあげる。データは，主として5・6才児に関するものであるが，敍述はより一般的な親子関係の把握をねらいとして行なわれる。

## 2 親子関係の事態

図1は，Lambert（1960）の図式をもとにして，親と子どもとの対人行動の状況をあらわしたものである。これは，比較的瞬時的な親子の相互作用の状況を客観的に示したもので，親子関係を解明して行くさいにとられる一つの見方である。input としてのSと，output としてのRとの間に，Pの内面の過程が介在している。外的刺激Sは，人Pの内部に現存している認知の枠組み，動因や欲求，目標，関心事，期待，価値体系などの相互作用により形成されている filter を通り，意味を付与されて内的刺激 s となり，表面にあらわれた行動Rを解発する。相互作用のサイクルは，図上の大部分の点から開始し得る。Glidewell（1961）などの人が認めているように，このような相互作用は循環性をもっている。たとえば，人 $P_1$ の行動 $R_1$ が，他の人 $P_2$ に対する刺激 $S_2$ となり，それによって解発された $R_2$ がまた $P_1$ に対する刺激 $S'_1$ となる。

現実の親子関係は，数多くのこのような相互作用の経験の総体からなり立っている。（説明の複雑化を避けるため，家族の他の成員との間の dynamics は除いているが，それも極めて重要なものである。）

この親子関係はどのようにして記述されるだろうか。ある親と子どもについて，上述の相互作用の系列を一定数集積してみると，その親と子どもに特有な相互作用の様相が存在していることがわかる。これを記述するさいに，通常，刺激に対する反応のあり方に注目して，親と子どもの相互作用における対人的反応の特性ともいうべき概念が使用される。このさい，親の側の反応のあり方のみを問題にすることが大部分で，一般に使用されている「拒否的な親」というような概念はこれにあたる。このような親の反応は，子どもの行動が刺激となりひき起されたものでもあり得るし，親の内面の動因からもまた，外的事象によってもひき起される。さらに，そのような親の行動に対する子どもの反応はさまざまである。しかし一般には，親の行動をひき起した原因や，それに対する子どもの個々の反応は問わずに，親の子どもに対する行動

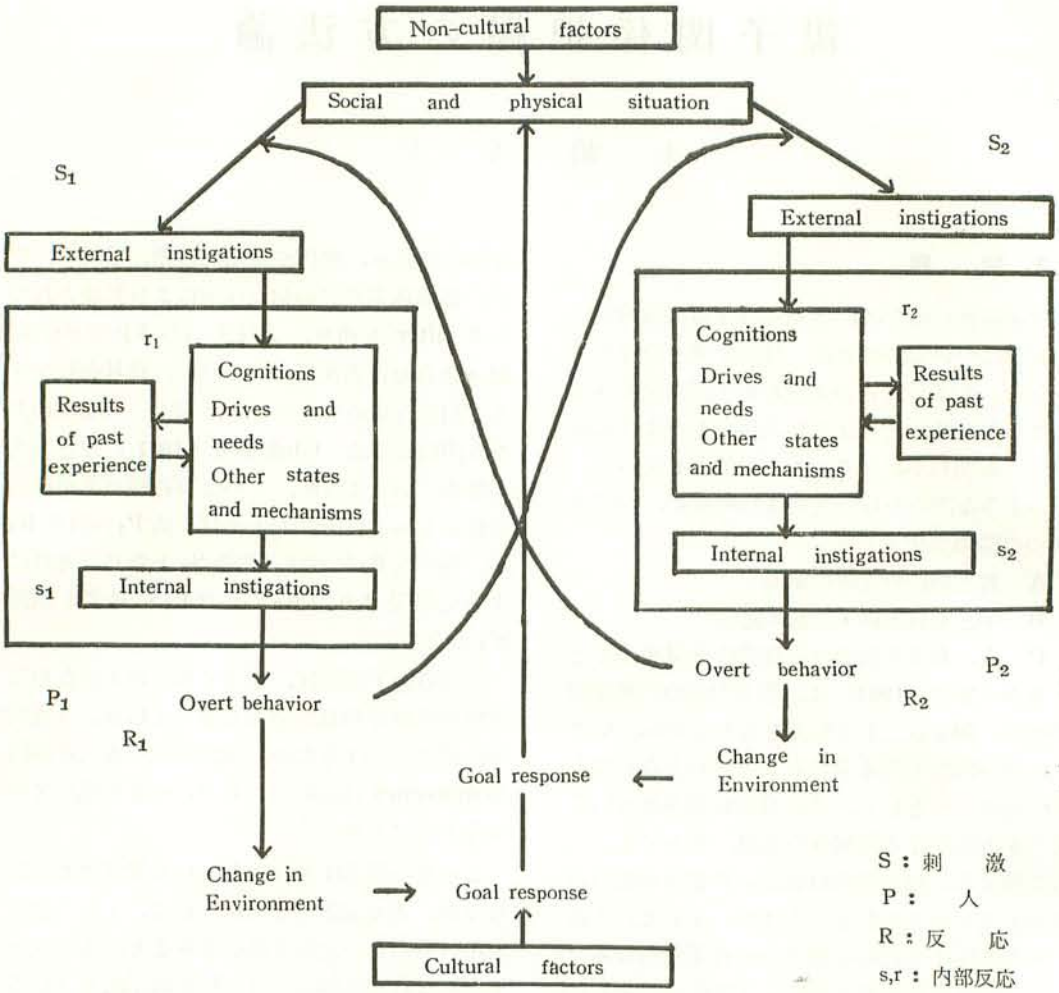


図1　親と子どもとの対人的行動の状況

のみを記述する。親と子どもの相互作用の過程は循環的なものであるから，その一つの位相に前後の過程が集約されているとすれば，それだけを切りとって記述することは許容される。

以上のような観点で親子関係を記述しようとする事態の中には，現存する親子関係という事態（S），それをうけとる人（O；親，子ども，観察者）と，それらの人が親子関係についてなした記述（R）がある。Oに関する変数（たとえば，対人行動に関する認知様式，他者に対する情緒的態度，諸欲求，社会的態度，価値観）とRに関する変数（たとえば，認知的，情緒的水準における親や子どもによる親子関係の記述）とは，測定操作を加え，それを明らかにすることによって操作的定義（Underwood, 1957, p.52）をなしうるものである。Sについても，その一部に測定操作を加えることができる。図1の overt behavior は，客観的に存在するものである。測定されたS，O，Rから，子どもについては，Rc＝f（Oc, S），親については，Rp＝f(Op, S)[1]の関数関係が見出される。すなわち，親子関係は子どもからみればRcとみられ，親からみればRpとみられるということがあきらかになる。

(1) Subscription の c, p は，それぞれ，子どもと親の変数であることを示す。

しかし，問題はそれで片付いたのではなく，つぎに，Rc と Rp との関係をあきらかにする必要がある。親が，「自分は，子どもにはできるだけのことをしてやっている」と思っているのに対し，子どもは「支配的で，自分のしたいことをすこしもさせてくれない親だ」と考えているかも知れない。親も子どもも，そのような認知にしたがって，相手に対する行動を方向づけている。もし，両者の認知が一致していれば，相互に真のコミュニケィションが成立し，効果的な相互作用が可能になる。逆に，両者の認知に不一致があれば，相互作用は妨げられ，対人関係も不安定になろう。このように，両者の認知の一致，不一致によりくりひろげられるダイナミックスをあきらかにすることが，有意味な親子関係の解明といえる。すなわち，親子関係の事態が，両者に対してもつ意味の記述と，それが親に対してもつ意味と子どもに対してもつ意味との相互関係の理解が大切になってくる。

この「意味」はきわめて主観的なものであるが，親子関係の記述は，主観の水準にとどまっていては不十分である。それでは親子関係の理解に役立っても，親子関係を支配する法則を見出して，親子関係の改善などの目的で，SやOの変数を操作できなくなるからである。

### 3　親子関係記述の方法

上述のように主観的な，しかし親子にとって現実的である親子関係を，より客観的に定位づけるために，筆者は2つの方法を考えている。

I　親子の相互作用を通して，両者によって共通に認められるようになった地位，役割，行動様式，規範，価値基準などが家庭にある。たとえば，妹をいじめないことが親と子どもの約束できめられているとか，一流大学に入ることに親子ともに価値を認め努力しているというような，親子相互に了解されていることがらである。研究者がこれを把握することによって，親子関係を客観的に，しかもその家族が属する文化との関連において定位づけようとする方法である。しかし，この方法では，親子関係のかなり限られた局面しか明らかにできない。このため，この方法をも包括した第二の方法が考えられる。

II　筆者（1963）がすでにあらましを述べたように，これは親子の認知している主観的「関係」の相互間の関係を理解し，それをさらに，より広い文脈の中に位置づけるやり方である。

(1)　現実水準[1]での親子関係の記述を，3つの観点（a．親；b．子ども；c．観察者）から求める。観察者の記述は，reference として入れるのである。それぞれの観点から親子関係を記述するのに，もっとも有用で意味ある次元を使用する必要がある。たとえば，親の報告を記述するのに有用な次元が，子どもの報告を記述するのに，同様に有用だとは限らない。3つの観点それぞれにおいて，有意味な記述が得られ，かつ，それぞれの内部で，記述に法則性と内的秩序があることを確かめる。

(2)　3つの観点からの親子関係の記述の間に，有意で予見可能な関係があるかを確かめる。

(3)　親，子どもそれぞれについて，親子関係についての態度・意見水準の，また，希望された水準での，および投影水準での反応を測定する。また，親子の人格要因（とくに，対人行動の認知に関する面）を測定する。これらの結果と(1)での記述を対応づけ，その記述の背景を採る。

(4)　親と子どもをとりまく家庭，社会，文化などの要因を測定し，また，親の人格形成に影響をおよぼしてきた諸要因を把握して，(1)および(3)での記述の背景を探る。

このようにして，3つの観点からの記述の相互関係がわかり，それはより客観的な諸要因と関連づけられる。3つの観点からの記述は，互いに一致する点も，不一致の点もあろう。それをそのようなものとして，しかも，より客観的な要因と関連づけて把握するのが，親子関係の

(1) これと対比させられるのは，意見・態度水準および投影水準である。

記述の目標だと考える。以下に，この提案の各ステップを，若干のデータをまじえ検討する。

**ステップ1**

親子関係の有意な記述のためには，子どもの発達段階によって，親子関係のどの局面が主として問題になるかを検討する必要がある。この点に関して，人格発達や発達的課題などの理論的研究とともに，実証的な研究が必要であり，そのいくつかに触れてみよう。

〔母子の接触の分析〕

筆者は，4才5カ月の女児（H）と5才10カ月の男児（N）の1名ずつを選び，7日間，毎日母親と面接し，それに先立つおよそ24時間のあいだに起った母子の接触を，母親がとったノートをもとにして話してもらった。話のあとで，脱落を防ぐために母子の接触に関する約50項目のチェックリストを使用した。記録されるのは，母子の対人的接触に限り，それがなににによって起り，どのような経過をたどって終結したかを，エピソードの形で記録した。このような形式の面接は，母親にノートをとってもらう点を除いて，Siegel（1960）の方法によったのである。記録の分析には，まず，報告をエピソードに分け，つぎに，それを，行なわれた接触様式で分類する。分類カテゴリーは，Bishop（1951），Barker and Wright（1954），Smith（1958），林・一谷・小嶋（1963b）などを参考とした。練習日を除いた7日間の記録にあらわれた接触形式は89種類あった。原表をまとめたのが表1である。ここでは，接触様式のカテゴリーをまとめて，開始された接触に対する反応の方向によって，＋－をつけてある。たとえば，母親が情報を求めたのに対して，子どもがそれを与えれば＋に，子どもが不安を示したのに対して，母親が放置しておけば－とする。また，接触の内容により，子どもの救助・依存に関する場面，子どもとの親和的接触に関する場面，子どもの親からの独立の場面，およびその他の場面（多くは，親が子どもの救助，親和的接触，独立の欲求と関係なく，指示，禁止をする場面）に区分されている。表をみると，N，Hの両方とも子どもの救助・依存に関する接触が多い。子どもの性や年令，母親の子どもに対する態度や，記録のセットなどの相違をこえて，調査された年令の幼児では，母親との救助・依存に関係する接触が多くみられた。生起の頻度の多さが，そのまま，心理的な重要さを示すものではないが，この種の接触が，全接触

表　1　　2名の幼児の1週間の母―子の接触の頻度（実数）

| 場面 | | 救助・依存 | | 親和的接触 | | 独立 | | その他 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 接触の形式① | 反応の方向 | N | H③ | N | H | N | H | N | H | N | H |
| 子ども―母親 | ＋ | 109 | 133 | 37 | 26 | 5 | 10 | | | 151 | 169 |
| | － | 41 | 52 | 18 | 2 | 2 | 4 | | | 61 | 58 |
| | 小計 | 150 | 185 | 55 | 28 | 7 | 14 | | | 212 | 227 |
| 母親―子ども | ＋ | 39 | 21 | 18 | 13 | | | 89 | 106 | 146 | 140 |
| | － | 1 | 3 | | | 14 | | 15 | 11 | 30 | 14 |
| | 小計 | 40 | 24 | 18 | 13 | 14 | | 104 | 117 | 176 | 154 |
| 合計 | | 190 | 209 | 73 | 41 | 21 | 14 | 104 | 117 | 388 | 381 |
| 総接触数に対する比率(%)② | | 49.0 | 54.9 | 18.8 | 10.7 | 5.4 | 3.7 | 26.8 | 30.7 | | |

① 左が接触の開始者，右がそれへの反応者
② N，H，それぞれ，388，381に対する合計接触数の比率
③ N：5才の男児，H：4才の女児

の2分の1内外を占めることは重要である。

〔親の概念の調査〕

幼児の親子関係を記述する場合に，どの局面を重視すべきかを推測するための別の方法は，子どもがもっている自分の親の概念を分析することである。筆者は，「あなたのお母（父）さんはどんな人ですか」という意味の教示で，大都市の住宅・商業地域の6才児86（男児37，女児49）名から，両親について，それぞれ1人5箇の反応を得た。得られた反応のうち，頻度のいちばん大なのは，父母の活動に関する記述で39～48％を占める。つぎに子どもとの接触に関係する記述で多くあらわれるのは，「――してくれる」または，「――してくれない」という欲求充足に関するものである。その内容は，ほしいものを買ってくれる，世話してくれる，手助けしてくれるなどの救助に関するもの，および，あそんでくれる，話相手になってくれる，かわいがるなどの親和的接触に関するものである。やさしい，こわいなどの情緒的反応も，16～20％ある。親と子どもの性の組み合せによって，出現頻度や，肯定的・否定的反応の割合などはいくらかことなる。しかし，親の概念を子どもが記述するさいに使用される枠組みには，差異はないようである。

Mott（1954）は，4，5才児おのおの18名の，口頭での反応と家族描画とから，幼児が母親についてもっている概念を調べている。それによると，母親は家庭を動かして行くきわめて活動的な人で，子どもの世話をしてくれ，危険なときには助けてくれる人だとされている。そのほか，Cederquist（1948），Duvall（1946），Lerner（1937），Meltzer（1943）も，幼児や児童がもっている母親観を調べているが，それらによると，母親は，子どものためにものをしてくれる人，子どもの身体的欲求に理解をもって世話してくれる人，困ったときには助けてくれる人，愛情をもって関与してくれる人，子どもの多くのいたずらを許してくれる人だとされている。Finch（1955）は，子どもが親についてもつ概念は，身体的外観や人格によるよりも活動（家事をする母，働らきに出ている父）に基いているとしている。幼児が父親についてもつ概念の研究は少ないが，やや年長の児童では，父親は家の boss だとか，breadwinner だとかされている。

以上のような外国の研究結果と，筆者の得た結果とは，よく似ている。すなわち，幼児は親を，①その活動によって，②救助，世話，保護，諸欲求の充足の源泉として，③情緒的接触の対象として記述することが多い。親子関係の記述を試みるさいも，これを参考にして，幼児にとって意味ある局面を扱かう必要がある。

〔C. C. P.〕

林・一谷・小嶋（1963a,b）の C.C.P.（A Test for Measuring Children's Cognition of Parents）は，子どもの認知している親の態度・行動を測定するために子どもに施行する検査で，ハーフ・トーンの絵24からなり立っている。場面は父母別に，子どもが親に救助を求める場面，親和的接触を求める場面，親からの独立を求める場面にわかれている。子どもが表出した種々の欲求にたいして，親はいかなる反応をするかを，子どもに書かせる。反応は，欲求拒否――欲求受容を中心とした評点組織により評点される。筆者はこれを前述の86名の幼児に施行した。幼児の反応の発達的位置づけを明確にするために，補助的に，小・中学生約2,000名のデータ（住田他，1963）を使用して，幼児のそれと比較した。

結果を総括してのべると，相対的にいって，幼児と小学校低学年の児童は，親に救助を求めたときに充たされることが少ないと感じており，小学校高学年や中学校の子どもは，親から独立を求めたときに充たされることが少ないと感じているといえる。このことは，年少の子どもでは，親に救助を求める欲求が強いので，それに対する親の拒否を強く感じるであろうし，それ以後の子どもでは，独立の欲求が強くなり，それに対する拒否を強く感じるのではないかと解釈される。そして，親和の欲求は，小学校高学年でやや高くなっているとしても，各年

令を通じて，比較的一定しているのではないかと思う。

Schaefer and Bayley (1960) は，生後3年までの子どもの母親の態度を観察し，その子どもが9～14才（中央値：13才）になったときに，母親に面接して子どもに対する態度をさぐり，31名について，両回の態度の一貫性を調べた。それによると，愛情―敵意の次元に関しては，両回の得点の間に有意な相関があったが，自律―統制の次元では，相関は正であったが有意ではなかった。かれら自身も認めているように，この研究には，方法論上の欠陥があり，完全な結論をひき出せないが，もし，自律―統制の次元に関しても，両回の測定に妥当性があるとすれば，つぎのようにも解釈できるとしている。つまり，母親の愛情に対する子どもの欲求は，各年令を通して一貫しているが，自律の欲求は，依存から独立へと変化すると考えられる。研究法の相違のため，この結果と，C.C.P.の結果を完全に比較できないが，筆者らの研究で，親和欲求に対する親の受容・拒否は，幼児から中学生まで，比較的恒常であるのに対し，救助欲求に対する親の拒否は年少者で多く，独立欲求に対する親の拒否は年長者に多いことは，子どもの欲求の変化を示しているとも考えられ，Scheafer らの結果と一致する傾向にある。

上述の3つの検討から，幼児の親子関係の分析には，救助・依存の局面を他の年令段階でよりも重視する必要があるということが示唆されたと考える。親子関係のどの局面を重視すべきかがわかれば，つぎに親子関係の記述の問題に入るが，そこで考慮すべき点をあげてみる。

「それぞれの観点において親子関係を記述するのに，もっとも有用で意味のある諸次元」を発見し，その構造をあきらかにするには，個人が他者を知覚する枠組みを見出す必要がある。

Cronbach (1958, p.365) によると，Hay は Coombs の方法論を拡大させて，個人のもつ知覚的空間の研究に優れた方法は，個人に，他の人々を評定するための次元をなんら示唆することなく，他者の対が類似している程度を評定させることであるとしている。これは，研究者がもっている先入見を評定者に強いることを避けるためであり，評定者に対する制限が少ない方法である。この方法は，観察者が多くの親子関係を記述する場合を除いて，親と子どもの dyad に適用することは困難である。しかし，これを変容して，子どもに「あなたに対する態度・行動に関して，あなたのお父さんとお母さんとはどういう点で似ていますか。また，どういう点で違ってますか。よそのお父さんやお母さんとくらべてどうでしょう」という意味の質問をしたり，親に同様の質問をして，自由記述を求めるとすれば，より構造化した記述法からは得られない記述の次元，およびその構造に関する知見が得られる可能性がある。

Kelly (1955) は，個人のもつ知覚的空間を決定するために，個人に，自分で選んだ次元について，他の人々を評定させている。

Cronbach (1958, pp.362―363) の提案はさらに構造化され，判定者に対する制限の多くなったものである。この方法では，多次元からなる評定尺度，形容詞のチェック・リスト，Q-分類のための陳述項目群などを，研究者があらかじめ準備しておく。これが知覚の空間を形成し，判定者はそれを使用して他者の位置づけを行なう。かれの述べる方法には2つあり，一つは，判定者が使用した人格の空間を map するためのもので，個人の判定者が他の人々についてなした陳述の多変数的分布を研究して，個人の判定者を分析することである。もう一つは，多数の判定者に，他者1名（もしくは，ごく少数の人）についての記述をさせることである。1名の判定者が，代表的な他の人々多数を知覚の空間上に位置づけると，かれらが空間上に占める位置は，その判定者の，他者についての個人的 map を示すことになる。特定の個人の map の特殊性は，多くの判定者の map をプールした結果と比較することによりわかる。それは，たとえば，各次元についての平均得点，分散，各次元間の相関などによって表現される。

しかし，この方法も，親子関係の記述に直接適用できるのは，観察者が多くの親子関係を記述する場合に限られる。

以上に提案された個人が他者を知覚する枠組みを見出したり，知覚的空間上に，個人が他者を記述するのに使用した空間を map するための方法は，親や子どもに直接適用できない。したがって，親や子どもが，相手を記述するために使用する次元や枠組みは，観察者の立場からの記述のそれらからの類推によって構成されることが多い。あるいは，親や子どもと接触して得た臨床的経験から有意味な次元を見出したり，また，親や子どもの認知構造についての理論的考察から，親や子どもの観点に立っての親子関係の記述の次元を設定したりする。われわれのC.C.P.では，これによっている。

このようにして設定された次元を使用して，親，子ども，観察者から，親子関係に関して得たデータを，別々に分析することになる。このさい，因子分析法がよく用いられるであろうが，3つの観点からの記述の分析から，類似した因子構造が見出されたとしても，3つの観点が類似したものだとはいえないこと，したがって，親子の認知差の有無も単純にはのべられないことはすでに述べた（1963）。

要するに，親の観点からの記述，子どもの観点からの記述，そして，reference としていれた観察者の観点からの記述も少なくともある程度は，主観的記述であり，それぞれの観点において，有意味な記述の枠組みが設定されたとしても，他の観点による記述との関連が不明で，いわば，お互いに宙にういた状態である。この3つの宙にういた記述の相互関係を知ることにより，お互いに宙にういたまま，3つの記述の関係を明らかにしようとするのがステップ2であり，次にそれを，より客観的に位置づけようとするのが，ステップ3，4であるが，それらは後に述べる。

「3つの観点それぞれの内部における記述の法則性と内的秩序」　法則性とは，恒常性とも関係ある概念である。記述の恒常性のためには，かならずしも，記述の対象となる事象自体の恒常性を必要としない。人間関係についての記述者の認知は，物体の認知と同様に，選択的性格をもち，事象を自己の枠組みにあわせて体制化し，統一化する傾向があるらしい。

子どもの立場からいうと，親という刺激状況に関する認知は，現前の親の態度・行動を知り，また，それに対する子どもの反応を方向づけ，規定するが，これらの背景には，先行経験の結果として子どもの内部に形成された認知の様式や態度，抽象化の結果としての諸概念，また，諸種の欲求やメカニズムなどが存在する。もちろん，子どもの認知した親の像は，子どもに特有な認知のずれをもってあらわれている。この親の像は，さきにも述べたように，種々のメカニズムにより，構成化，体制化され，それなりに恒常性を有しているらしい。それは，ちょうど，物理学的事象についての知覚の恒常性の現象と同じように，親に対する子どもの適応行動を，すくなくとも一定期間，有効にする考えられる。この，少なくとも一定の期間は安定していると考えられる，子どもの認知した親の像(Ittelson, 1961のことばを借りればassumptive なもの，Rogers, 1964は，hypothesisという）により，子どもは親に対して行動するのである（Ittelson : verification of assumption)。それによって，認知はさらに変化して行く。親の立場から述べても，同様のことがあてはまると考えられる。

しかし，この認知を通した記述も不変ではなく，対象となる事象自体の変化によっても，また，記述者の内部要因の変化によっても変動する。記述に法則性がみられるということは，記述が，時間の流れ，状況の変化と関係なく，不変であることを要求しているのではなく，記述の変化が，なんらかの法則性に従がっていて，その変化の説明や予見が可能だということである。「内的秩序」とは，内的整合性と関係した概念であるが，これは，状況を超えて，記述が同質であることを要求するのではない。たとえば，子どもが，「お父ちゃんは怒るときは嫌い

だけれど，やさしいところもあるから好きだ」と述べたとすれば，Aという状況では怒るから嫌いだけれど，Bという状況ではやさしくて，全体としては好きだという記述が，相互に調和して成立しているのであって，これは内的秩序をもたないとは言えない。

### ステップ2

例でいうと，親が「自分は愛情をもって子どもに接している」といい，子どもも，「愛情ぶかい親だ」といい，また，観察者も「あの親は子どもに対して愛情をもっている」といったとき，はたしてその「愛情」が同じ次元のものであるか，また，ちがっているとすれば，相互にどのような関係にあるかを確かめる必要がでてくる。これを確かめるには，因子分析的には，各観点から別々に抽出された因子の事例別因子得点の相関を調べる方法と，Cartwright 他(1957)が，カウンセラー・クライエント関係の分析に用いたように，個々の親がその子どもに対してとっている態度・行動を，前述の3つの観点から測定した結果をバッテリーに組み因子分析することであることは，以前に述べている。

この領域において，筆者が，幼児，その両親および幼稚園の教師から得た資料の予備的分析から得た印象を，きわめてテンタティヴに，仮説として提出しておくと，次のようになる。すなわち，もし，親子関係を，統制および愛情の2次元で記述するとすれば，統制の次元に関しては，3者の記述はかなりの程度共通性を持つのではないかと推測できる。すなわち，三者の記述における「統制」の意味はかなりの程度まで等質的であり，かつ，ある親子関係での統制について，三者がそれぞれの観点から記述した結果はかなり類似すると予想される。それに対して，子どもに対する親の態度・行動を，愛情あるもの，または，受容的なものとみるか，それとも，敵意あるもの，または，拒否的なものとみなすかは，事実に対する主観的な意味づけ，解釈に関するものであるから，相互作用に関与するものの立場によってことなる可能性が大きいと考える。したがって，この次元に関しては，統制の次元に認められたような意味の等質性の存在は確定できず，また，相互の記述間の関係も明確でない。この関係については，筆者は，観察者からみて，情緒不安定とみられるような親の対処のしかたは，幼児によって，拒否的と認知されるのではないかという知見を得た段階にとどまっている。

### ステップ3

「親子関係についての，態度・意見水準の，希望された水準の，および投影水準での反応の測定」　ステップ1での記述は，現実水準での反応に限ったのであるが，親や子ども，さらには観察者が行なった記述の背景には，「子どもの育てかたはかくあるべきだ」という態度・意見水準の，また，「こういう親でありたい」，「こんな親であってほしい」という希望された水準での，さらには，親や子どもの意識的・無意識的な諸欲求の投影された水準での反応が存在している。現実水準での親子関係の記述を，このような文脈中に位置づけて理解することは，親子関係の理解に有意味である。このような種々の水準での親子関係の記述は従来から行なわれているが，それらと，現実水準での記述との因果的対応づけの試みは，まだなされていないように思う。

「対人行動の認知と関係する人格要因を測定すること」　すでに述べて来たように，親子関係についてなされた記述は，親子関係そのものでなく，記述者に特有なずれをもっている。このずれ，もしくは歪みそひきおこす要因と，その作用を把握しておくことは，得られた記述を理解するためにきわめて重要である。このずれは，反応の set によるもの，implicit personality theory や stereotype の影響や，自己をよい光にあてて記述しようとする態度によるものもある。最後の例は，Radke (1946) や，中西他 (1953) のデータにもあらわれている。さらに，人格に根ざした要因も関与してくる。表2は，先にのべた C.C.P. と，Rosenzweig, S. の P-F Sudy とを，前述の幼児に施行した結

果である。C.C.P. の欲求拒否反応（D＋R＋I）の量により，父母別，男女児別に，子どもを3群にわけ，P-F の得点を比較したものである。H群は，親による欲求拒否を多いとする群，L群は少ない群，M群はその中間にある。統計的に有意でない箇所もあるが，すべての群において，P-F のE（外罰方向）反応は，C.C.P. の欲求拒否の多い群（H），また，ときによっては欲求拒否の中程度の群（M）に多い。この方法とは逆に，P-Fの個人別の類型化を，日本版の標準からのずれにより行ない，類型別にC.C.P. 反応を比較したところ，P-F のE反応と，C.C.P. のR（拒否）反応との間に関連があることが見出された。

表2　C.C.P. の∑R と P-F　数値は平均値（　）内はSD

| 子ども | 親 | CCP／人数／P-F | H 群 | M 群 | L 群 | Fの有意水準 | 有意差のある平均対 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 10 | 14 | 13 | | |
| 男児 | 母親 | E% | 61.58 (15.03) | 40.98 (15.52) | 40.17 (15.02) | .01 | H：M H：L |
| | | I% | 17.23 (8.47) | 28.19 (9.18) | 25.37 (10.03) | .05 | H：M H：L |
| | | M% | 21.21 (8.45) | 30.83 (12.00) | 34.46 (10.49) | .05 | H：L |
| | 父親 | 人数 | 9 | 16 | 11 | | |
| | | E% | 50.19 (18.64) | 45.02 (13.41) | 42.58 (21.21) | — | |
| | | I% | 20.20 (7.80) | 27.79 (9.40) | 23.05 (11.87) | — | |
| | | M% | 29.61 (12.65) | 27.17 (8.17) | 34.36 (13.61) | — | |
| | | e | 5.00 (1.58) | 4.53 (2.26) | 3.00 (0.68) | .05 | H：L M：L |
| | | M′ | 1.50 (0.57) | 1.03 (0.72) | 1.73 (0.44) | .05 | M：L |
| 女児 | 母親 | 人数 | 15 | 20 | 14 | | |
| | | E% | 49.50 (13.70) | 48.27 (18.91) | 41.64 (13.47) | — | |
| | | I% | 23.70 (8.83) | 20.04 (9.37) | 22.12 (5.97) | — | |
| | | M% | 26.79 (12.88) | 31.67 (12.63) | 36.23 (16.30) | — | |
| | | E | 4.87 (1.85) | 5.38 (2.59) | 3.00 (2.03) | .05 | H：L M：L |
| | | m | 1.93 (1.48) | 3.23 (1.93) | 3.75 (2.15) | .05 | H：L |
| | 父親 | 人数 | 13 | 21 | 15 | | |
| | | E% | 48.59 (19.70) | 46.94 (14.47) | 44.89 (16.97) | — | |
| | | I% | 22.16 (10.04) | 20.70 (6.19) | 22.89 (9.79) | — | |
| | | M% | 29.25 (11.70) | 32.34 (13.07) | 32.21 (13.87) | — | |

C.C.P. の欲求拒否反応（D＋R＋I）や，拒否反応（R）と，P-F のE反応などの関連については，2つの説明方法が可能である。

① Rosenzweig によれば，P-F のEタイプのものは，他者から非難・攻撃をうけはしないかと恐れる自我をもち，かれがとる防衛の型は投射である。したがって，外罰的な子どもは，自分が親に対してもつ不満や敵意を親に投射して，親が子どもに敵意をもち，拒否的な態度をとると認知する可能性がある。また，Iタイプのものは，他者を非難・攻撃することを恐れる自我をもつために，それを自己に置きかえて処罰への欲求があらわれ内罰的になるとされている。したがって，このタイプの子どもは，親を処罰しないものと認知する傾向があろう。P-FのMタイプのものは，他者から疎隔され愛情を失なうことを恐れる自我をもつために，妥協の動機が強く働らき，自己ぎまんをして抑圧しようとするとされている。したがって，このタイプの子どもは，親の態度を，欲求受容的な，愛情あるものと認知すると考えられる。以上の考えは P-F にあらわれる人格要因を，C.C.P. の規

定要因の1つと考えるやり方である。

② P-F が示しているものを，C.C.P. の後続変数の1つと考えるやり方である。すなわち，C.C.P. が示しているように，親によって欲求の不充足すなわち欲求不満を経験させられると，子どもは攻撃的となり，P-F でも外罰反応（E）を示すようになると考えるわけである。

①の考え方では，両要因は同時的であり，②の考え方では，両要因は継時的であり，先行変数（C.C.P.による）が，時間の経過によって変化していないことを仮定している。同一の被験者から，2種の測定値を得て，その相互の関係を考えるさいには，つねにこの問題に直面し，いずれの考えが正しいのか，または，第三の考えが正しいのかのきめ手がない。この因果関係の方向を知るには，詳細な要因分析か，実験的な条件操作が必要である。

林（1963）の研究は，中学年令の非行少年50名の P-F 反応と，C.C.P. に対する母親の反応と子どもの反応とのずれの方向との関係をみている。子どもに施行するのと同じように，母親に C.C.P. を施行し，日常，自分が子どもに対してなしてきた接し方をきき，反応の分類には子どものなした反応を分類するのと同じカテゴリーを仮に用いた。母と子どもとの反応の類型のくいちがった14例について，その子どもの P-F 反応の型をみると，親が自分をD（支配）とみているのに，子どもは親をC（受容的統制）とみている2例の子どもの P-F 反応のタイプは，ともにMである。C.C.P. への親の反応は，主観的な反応であって，実際に親がとっている態度・行動のそのままの反映ではないが，親が自分の欲求拒否的と認めることは稀であり，そう認めている限りは，実際に欲求拒否的であると考えてよいとすれば，子どもが親を受容的統制を行なうものと報告したことは，P-F がMであることが示すように，抑圧による自己ぎまんと考えうる。

親が自分をCと思い，子どもが親をDと認知している7例のうち6例の子どもの P-F 反応はEタイプであり，子どもの投射のメカニズムの作用が考えられる。

親が自分をS（服従）と思っているのに対して，子どもは親をI（無関心）と認知している5例の子どもは，P-F ではIタイプであり，ずれは，子どもの処罰への欲求の影響によるものとも考えられる。なお，P-F と，C.C.P. との関連について，逆の考え方も可能なことはすでに述べた。

以上の林の結果で注目すべきことは，母子間の認知のずれが，D（支配）とC（受容的統制）の相互の間，および，S（服従）とI（無関心）の間でおこっていることである。すなわち，DとCとは，統制が行なわれているという点では共通であり，ただ，その統制を欲求受容的なものと解するか，欲求拒否的なものと解するかがことなっている。同様に，SとIとは，統制が行なわれていないという点では共通しており，それを欲求受容的とするか，欲求拒否的とするかがことなっている。このことから，きわめてテンタティヴにではあるが，中学生水準では，親の子どもに対する統制が行なわれているかどうかという事実に関するみかたは，親子ともに一致し，それを欲求受容的とみなすか，欲求拒否的とみなすかが親子によりことなるのではないかと考えられる。このことは，ステップ2で述べた筆者の知見と一致する。

親子関係の認知と人格要因との関係を扱かった別の研究としては，精神分裂病者が，自分の親の態度・行動をどのように認知しているかを調べた Singer（1954），Lane and Singer（1959），Heilbrun（1960）らのものがあげられる。これらは，分裂病者に T.A.T. やそれを改作したもの，PARI などを施行して，かれらは正常者とくらべて，自分の親をより専制的・統制的だとしており，また，拒否的だとすることもあることを報告している。しかし，このことから，親を専制的・統制的と認知することが，分裂病の原因となったかどうかは決定できないことは，すでに述べた通りである。すなわち，両者の関連を説明するのに，3通りの考え

方ができるからである。さらにまた，分裂病者の親が実際に専制的・統制的であるにしても，それが発病の以前から継続しているのか，発病の結果として，そうなったのかはわからない。

Heilbrun (1962) は，女子大学生多数にM.M.P.I. を施行し，そこから，正常群（52名）と異常群（現在のところは，かなりよく適応しているもの56名）を選別し，かれらに PARI を使用して，自分の親ならどう反応すると思うかを反応させた。その結果，異常群の反応は，正常群のよりも逸脱したもの（とくに，専制的・統制的と母親を記述する）であること，また，母親を専制的・統制的とした正常群と異常群とを，need scale で比較すると，後者のほうがより独立的で社交性に富み，支配的で変化を求める人格の持主であることを見出した。そして仮説として，娘におけるそのような人格は，その逆の人格よりも，母親を専制的・統制的とみたときに，より重い心理的障害を媒介するのではないかと述べられている。しかし，この場合も，need scale による測定と，M.M.P.I. による測定とは，人格を2つの方法で測定したものにすぎず，両者の関係については，逆方向の解釈や，また，別の要因が両者の原因になっているという解釈を完全に排除できない。

### ステップ4

「親や子どもをとりまく家庭・社会・文化などの要因の測定」　これらの要因と育児法，しつけのあり方，親子関係などとの関連を扱かう研究は，文化人類学，社会学および心理学の領域で行なわれている。心理学では，これは，親子関係，育児法，しつけの地域差，階層差，世代差，宗教によるちがい，親の学歴によるちがいなどとして取りあげられて来た。ステップ1からステップ3までの過程を進んできた親子関係の記述を，このようにより広い文脈の中に位置づけ，客観性という土地に繋留することにより，親子関係の把握は，一応その目的を果すと考える。

しかしながら，4つのステップは，それぞれ困難な問題を含み，これらは，いずれも早急に解決されるとは思えない。最大の難点は，ステップ1でのべた測定の不備であり，また，ステップ3でのべた因果関係の決定にある。この2つに努力を注ぐ必要がある。

## 4　子どもの人格・行動との関連における親子関係の記述

以上でのべたことがらは，1で述べた3つの問題のうちのA，すなわち，親子関係や家庭の記述の問題の枠内に限られている。この先行変数は，後続変数である子どもの人格・行動と関連づけられるのであるが，そのさい，先行変数のどの局面，すなわち，3つのうちのどの観点からの記述を，後続変数と関連づけて行くべきであろうか。筆者は，子どもの観点からの記述が第一にとりあげられるべきだと考えている。他の観点からの記述は，子どもの観点からの記述という連鎖を通して，子どもの行動と関連づけられるものと思う。

子どものとる行動は，ある程度まで，その子どもがもつ親子関係によって規定されるとすれば，この規定を行なうもっとも直接的な要因は，子どもが認知している親の態度・行動である。ここで，もっとも直接的という意味は，因果関係の，または影響関係の系列にあって，もっとも，その結果――子どもの行動――に近い位置をしめているということである。子どもにとっては，自分が認知している親の姿が現実なのであり，子どもの行動はそれによって規定される。したがって，まず，子どもの認知している親の姿をあきらかにすることが必要である。

しかし，人間の行動は，意識としてとらえられない要因によっても規定されるし，また，人間の知覚または認知内容と，その人間による認知内容の報告とが一致しているという保証はない。そして，すでに上に述べて来たように，子どもの観点のみからの主観点記述だけでは，不十分である。子どもの行動と関連させられるのは，さきに述べたような手続きであきらかにされた親子関係の多面的記述で，そのうちの子どもの観点からの記述を，子どもの人格・行動と

関連させるさいの接点とするのである。

上に述べてきた親子関係の記述では，親子関係全体を扱かうこともある。しかし，先行変数として，親子関係のどの局面をとりあげるかは，つぎの2つによって決定される。すなわち，①1で，Bの問題としてあげた子どもの人格・行動の変数として，なにをとりあげるか。②1で，Cの問題してあげた，親子関係と子どもの人格・行動をあきらかにするために，どのような理論的立場をとるか，である。

（本論文の一部分は，筆者の未発表の論文，子どもの認知を通した親子関係の分析，京都大学大学院教育学研究科博士課程資格論文，1963.の一部をもとにして書き直したものである。）

## 文　献


Barker, R. G., and Wright, H. F. Midwest and its children. The psychological ecology of an American town. Evanston, Ill.: Row, Peterson, 1954.

Bishop, B. M. A study of mother-child interaction. Psychol. Monogr., 1951, 65, No. 11. (Whole No. 327), 34pp.

Cartwright, D. S., and Roth, I. Success and satisfaction in psychotherapy. J. clin. Psychol., 1957, 13, 20-26.

＊Cederquist, H. T. The "good mother" and her children. Smith Coll. Stud. soc. Work, 1948, 19, 1-26.

Cronbach, L. J. Proposals leading to analytic treatment of social perception scores. in Tagiuri, R., and Petrullo, L. (Eds.), Person perception and interpersonal behavior. Stanford: Stanford Univer. Press, 1958, Pp. 353-379.

Duvall, E. M. Conceptions of parethood. Amer. J. Sociol., 1946, 52, 198-203.

＊Finch, H. M. Young children's conceptions of parent roles. J. Home Econ., 1955, 47, 99-103.

Glidewell, J. C. On the analysis of social intervention. in Glidewell, J. C. (Ed.), Parental attitudes and child behavior. Springfield, Ill.: Charles C Thomas, 1961, Pp. 215-239.

林　勝造　非行少年の親に対する認知像の研究　犯罪心理学研究，1963，1，45—50.

林　勝造・一谷　彊・小嶋秀夫　C.C.P. (A Test for Measuring Children's Cognition of Parents) 大阪大成出版社牧野書房　1963a

林　勝造・一谷　彊・小嶋秀夫　ＣＣＰ解説　親に対する子どもの認知像の検査法　大阪　大成出版社牧野書房　1963b　165pp.

Heilbrun, A. B., Jr. Perception of maternal child-rearing attitudes in schizophrenics. J. consult. Psychol., 1960, 24, 165-173.

Heilbrun, A. B., Jr., and McKinley, R. Perception of maternal childrearing attitudes, personality of the perceiver, and incipient psychopathology. Child Develpm., 1962, 33, 73-83.

Hurlock, E. B. Child development (3rd edition). New York: McGraw-Hill, 1956.

Ittelson, W. H. Perceptual theory and personality dynamics. in Ittelson, W. H., and Kutash, S. (Eds.), Perceptual change in psychopathology. New Brunswick, N. J.: Rutgers Univer. Press, 1961, Pp. 3-18.

Kelly, G. A. The psychology of personal constructs. New York: Norton, 1955.

小嶋秀夫　親子関係の心理学的分析　京都大学教育学部紀要，1963，9，125—144.

Lambert, W. W. Interpersonal behavior. in Mussen, P. H. (Ed.), Handbook of research methods in child development. New York: Wiley, 1960, Pp. 854-917.

Lane, R. C., and Singer, J. L. Familial attitudes in paranoid schizophrenics and normals from two socioeconomic classes. J. abnorm. soc. Psychol., 1959, 59, 328-339.

＊Lerner, E. Constraint areas and the moral judgment of children. Menasha, Wis.: Benta, 1937.

Meltzer, H. Sex differences in children's attitudes to parents. J. genet. Psychol., 1943, 62, 311-326.

Mott, S. M. Concept of mother — a study of four- and five-year-old children. Child Develpm., 1954, 25, 99-106.

中西　昇・小西勝一郎・谷　嘉代子　親子関係の

心理学的研究 大阪市立大学家政学部紀要, 1953, 1, 183—223.

Radke, M. J. The relation of parental authority to children's behavior and attitudes. Minneapolis: Univer. Minnesota Press, 1946.

Rogers, C R. Toward a science of the person. in Wann, T. W. (Ed.), Behaviorism and phenomenology. Chicago: Univer. Chicago Press, 1964, Pp. 109-140.

Schaefer, E. S., and Bayley, N. Consistency of maternal behavior from infancy to preadolescence. J. abnorm. soc. Psychol., 1960, 61, 1-6.

Siegel, I. E. Influence techniques: a concept used to study parental behavior. Child Develpm., 1960, 31, 799-806.

Smith, H. A comparison of interview and observation measures of mother behavior. J. abnorm. soc. Psychol., 1958, 67, 278-282.

住田勝美・守阪良二・林 勝造・一谷 彊・小嶋秀夫 CCPの研究(4)ノーマティヴ・スタディ 1 発達差 日本心理学会第27回大会発表論文集, 1963, 226.

Underwood, P. J. Psychological Research. New York: Appleton-Century-Crofts, 1957.

〔註〕 * Hurlock (1956) による。

## Methodology for Measuring Parent-Child Relations

Hideo Kojima

Refining, and adding some related data to, the previous proposals, the writer suggests a method to grasp the parent-child relations more completely.

Step 1. To assess the parent-child relations from the viewpoints of parents, child, and observer. In order to find the most meaningful dimensions for the description of parent-child relations by each of them, in the first we should know which aspect of the relations is regarded as important by each age level of children. The writer finds that at preschool level, parent-child relations in the aspect of dependence on parents are more important than at any other age level. In the second, we should reveal the perceptual space in terms of which parents, child and observer perceive each other.

Step 2. To examine whether there exists significant and predictable ralation among the three kinds of descriptions at step 1. The writer hypothesizes that descriptions of parent-child relations by the three persons on the control-autonomy dimension may be consistent with each other, while on the love-hostility dimenion, they may not be.

Step 3. To assess the attitude or opinion level of, the wished-for level of, and the projective level of responses about parent-child relations, and also the personality factors of parents and child respectively. Then these measures of parents and child are respectively to be related to those of them at step 1. The writer finds that at preschool level, extrapunitive children describe their parents as more rejective than children of other P-F types.

Step 4. To assess the cultural, social and historcial factors of the family, and to relate them to the masures at step 3 and 1.

When we try to find the antecedent-consequent relations between parental attitudes or behavior and child's personality or behavior, the parent-child relations variables obtained from child should first be used as antecedent variables, and through which other antecedent variables obtained from parents and observer are to be related to the consequent variables.